

スポーツ診療ビジュアルブック

櫻庭景植 ● 監訳

〔評者〕 田中寿一 (医療法人社団青洲会アイワ病院 院長)

本書を机に置いておくと、そのカラフルな表誌が目飛びこんでくる。思わずページをめくりたくなる色彩である。そして、その意のままに開いてゆくと、ほとんどの各項目が見開き2ページにうまく収められ、左手に解説文、右手に鮮やかなカラーイラスト(+写真)が配置され、統一性を見せている。

さて、その内容は、体の各部位別に7つに分け記述している。それぞれが、適応と目的・手術手技・術後管理とリハビリテーション・予後・そしてアスリートが最も重要視する競技復帰の項目に沿って書かれている。なかでも、運動器の四肢を中心に書かれている項目では、最小侵襲手技・関節鏡を駆使した治療を、最も汎用性の高い膝関節・肩関節領域では最新の手術法の紹介がなされている。加えて、脊椎外科・膝/股関節の人工関節にも及び、高齢社会のスポーツ活動にも言及している。

さらに、驚くべきは、付随するプライマリケアの項目である。一見スポーツ活動とは、関係ないような項目がある。しかし、チーム医療を行ううえで、最も注意すべきは専門外の領域のケアである。これら記述されている項目は、スポーツ選手の日常ケアに必要な最

低限の領域が網羅されている。この項目のみでも一冊のスポーツ診療ブックに値するほど、多岐に渡りかつ内容が濃く記載されている。このため、ハイレベルの競技チームには、ぜひ備えて置くべき一書物ではないかと考える。

一方、本書は、“ビジュアル”と表記してあるように素晴らしいイラストにより説明文を読むより先に目からその内容が瞬時に把握できるように構成されている。自身33年間で15,000例を超える手術を行ってきたが、手術直後に、色鉛筆を用いてシェーマを書くことを常に行ってきた。最近では、術中写真・ビデオなど、手術を伝える手段は豊富すぎるほどあるが、記述文より自分で描いたシェーマは、一目で手術時の要点・コツを記載できる唯一無二の方法とあって、今でも描き続けている。本書のカラーイラストは、著者各位が、きつとイラストレーターを通じて手術時の要点・コツを描かせたものと察しできるほど素晴らしい出来栄である。

さて、Chapter別に詳細に内容を見てゆくと自身の得意分野では確かに物足りない内容も多い。これは個人の治療経験の量によることや、また多数の執筆者が多岐に渡る記述による集約制作のためではないかと考える。このため、詳



細な手術手技、個々の技法の解説は、各専門分野の書にその任務を預け、スポーツ診療を行ううえでは、この書は十分すぎるほどの内容を有しているといえる。

本書は、実際に治療に携わっているスポーツ整形外科医はもとより、これからスポーツ診療に携わろうとしている若い医師の入門書としても、また、理学療法士・スポーツトレーナーなどのメディカルスタッフ必携の書といえるのではないかと考える。

A4変判・416頁(オールカラー)

2016年

定価：本体13,000円＋税

[ISBN 978-4-89592-856-4]

MEDSi 刊